



「かみつき」防止の取り組みに関する考察



氏 名：大須賀 剛

目次

序論.....	1
第一章 原因分析	3
第一節 かみつきの原因	3
第二節 かみつきと子ども相互の密度の関係	5
第二章 子ども相互の密度とデイリープログラムの関係.....	5
第一節 子ども相互の密度が上がるデイリープログラムの場面.....	6
第二節 子ども相互の密度を下げるための方策	8
課題.....	11
参考文献	12

序論

1歳前後の言葉でのコミュニケーションが未発達の子どもの「かみつき」「ひっかき」「たたく」といったトラブルは保育施設では多く派生している。この考察ではおもに特にこれらトラブルの中でも保護者を巻き込みクレームの原因となりやすく、多くの保育園で問題となっている「かみつき」に焦点を絞り原因と解決策、そして解決策に対して保育士一人ひとりだけでなく、保育施設が組織としてどう取り組むことができるかについて考察する。

かみつきがこれら子どものトラブルの中でも、受傷の重症度如何にかかわらず保護者を巻き込みクレームの原因となりやすい理由については別な課題として、今回の考察では「かみつき」について取り上げる。

細田・戸田・氏家(2016)は「核家族化に伴って子育てに関する知識や経験が祖父母から後世に伝承されていない現実がある。その環境下で親になった保護者は正しい育児に関する知識が欠如している傾向にある」ことから「従来、かみつきは1, 2歳児には時々起こることとして保護者にある程度受け入れられていたが、今はそうではなくなった。」と述べている(pp2-3)。今では多くの保護者にとって「かみつき」は保育園で起こってはならないことなのである。

一方で前出の研究の調査では「かみつき」が発生した後の保育士の対応としては「なぜかんだのか理由を聞く、かんではいけないと注意する、痛いことを知らせる、自分の気持ちを言葉で知らせる」と述べられている(p11)。また、細田・戸田・氏家(2016)の調査でも同様な保育士の事後対応が示され、保育士の対応が

事後反省的なものにとどまっていることが見て取れる。

保育士の対応が事後反省的なものになっている理由としては、保育士が「かみつき」の原因を園児の気持ちや、やってよいことといけないことの知識・判断力が不足していることに起因していると考えていることが一つと、「かみつき」は1, 2歳児には起こることが仕方ないものであり、「かみつき」などを通じて他者に危害を加えることはいけないことであることを学んでいく、発達・成長の過程である程度必要なもの、ととらえていることにあると考えられる。

結果、「かみつき」をありえないと考える保護者と「ある程度しかたない」と考える多くの保育士との間で「かみつき」に対する意識にギャップが生じており、「かみつき」に対して保育士は保護者が求める「かみつきを防ぐ」対応をすることができず、結果として保護者とのトラブルにつながると考えられる。

このギャップを埋めるためには、「かみつき」は集団生活では起こっても仕方ないもの、子どもの成長にはある程度必要なものという考えではなく、「かみつき」は起こるべきではないものという考えに立ち、現実的にはゼロにできない部分、起こってしまったことは教育的見地から子供の成長に生かすようにするとしても、あくまで「かみつき」を防ぐ努力を最大限にしていくべきである。

また、対保護者の課題ということからも、単に個々の事例へ保育士が対処するだけでなく、施設として組織的に「かみつき」発生防止へ取り組む必要がある。

そのために園児の心理状態や発達・成長など個別の園児に属する要因はいったん排除し、デイリープログラムや環境構成の中で「かみつき」の発生要因を探り、解決策を検討していく。

第一章では先行の研究事例と自園での事例から原因を分析する。次に同様にこれら分析結果から「かみつき」には園児の密度¹が関係していることを示す。

第二章では子ども相互の密度が原因となる「かみつき」を防ぐためのデイリープログラム及び環境構成の工夫について考察する。まず、これまでのデイリープログラムの中で子ども相互の密度が上がる場面を抽出する。次に子ども相互の密度が上がる場面を排除する、もしくは子ども相互の密度が上がる場面で子ど

¹ 「密度」という言葉については、この場合は複数園児相互の粗密の程度を意味する。また、園児同士の粗密を表すため特に「子ども相互の密度」という言葉を使用する。分母となる空間が特定しづらいため「過密」「密集」といった言葉のほうが表現としてわりやすいかもしれないが、先行研究として取り上げている藤岡、八木(1994)において「密度」という言葉が使用されているため、本稿では「密度」という言葉を使用する。

も相互の密度が下がるようなデイリープログラム及び各場面での環境構成の工夫について提案する。

最後に課題としてこれらデイリープログラムの工夫を実際に保育の現場で組織的に実践するにあたっての課題を提示する。

第一章 原因分析

ここでは先行研究と筆者の勤務する保育園での具体的事例から「かみつき」が多くの場合「不意の接触」によって起こり、不意の接触が起こりやすい子ども相互の密度が上がる場面が存在することが「かみつき」発生の主たる原因であることを示す。

第一節 かみつきの原因

金子・日野原・二木(1968)によれば、かみつきの原因を内的要因と外的要因に分けることができる。

「内的要因」子ども個々の成育歴や家庭の養育状況に起因する精神発達の特徴
「外的要因」かみつきの発生を左右する環境因子

内的要因は「かみつき」の個々の事例に対し「かみつき」が発生した前提条件として考慮しなければならないものであり、また内的要因に何か変更を加えて改善を行うことは時間がかかり、家庭との連携が不可欠なものになってくる。

それに対し外的要因は保育中に関しては保育所が提供するサービスそのものであり、保育所が「かみつき」に対する防止策を考える上では外的要因にどう対処するかが中心になってくる。

藤岡・八木(1994)は、金子・日野原・二木(1968)の「内的要因」「外的要因」に言及した上で、「かみつきがただ子ども自身の問題、家庭の問題としてのみ理解されることが、保育所でのかみつき研究の停滞を招いたという反省から、「外的要因」の分析に力点をおくとともに、これに対する保育所保育の責任と課題を明らかにしようと考えた。」と述べ、保育所における外的要因への対応を中心とする「かみつき」防止策について保育所が組織的に取り組む必要があることを示した。

藤岡・八木(1994)は外的要因を以下の5つの項目から調査・分析した。

- ① 月齢：「0歳の後半から現れ、20か月（台）の前半にピークを、以降急速に終息に向かいながら3歳の半ばにはほぼ完全に終息する」
その他の研究でも、中村・北野・藤岡・八木・山下(1998)では「17か月から20か月に細田のピーク」、中川(2016)では「22～26ヶ月」に多いとなっており、20か月前後をピークに12か月～35か月の月例児が在籍する1歳児クラスでのかみつきの多いという結果になっている。
- ② 場所：9割以上が屋内で発生。ほとんどが保育室・遊戯室（84%）だが、手洗い、トイレでもかなりの発生が見られる。
- ③ 時間：午前中の合同保育と主活動中が多い。ついで食後から午睡の間の時間（着替え・排泄）。また、その他の研究でも、中村・北野・藤岡・八木・山下(1998)や中川(2016)にも示されている通り、月曜日の発生が多い。
- ④ 場面：遊びが全体の66%。ついで「その他」。「その他」は「排泄の前後、手洗い、移動中、次の活動への移行中などデイリープログラムの切れ目にあたっているような場面がほとんど」
- ⑤ 動機：「物の取り合いや邪魔をされたから」がもっとも多く58.6%。次いで「たまたま口の位置にきたので」が15.4%と多い。どちらも「子供同士の衝突や不意の接触が原因」

筆者の勤務する園でも2018年8月～2019年2月の「かみつきの」報告事例で、これら5項目で見ると同様の結果になっている。

2018年8月～2019年2月調査 カッコ内は件数

- ① 月齢：15か月（1）、16か月（1）、17か月（1）、18か月（1）、19か月（4）、20か月（1）、22か月（2）、29か月（3）。クラス別では1歳児クラス（8）、0歳児クラス（6）。
0歳児後半から1歳児の後半、クラスとしては1歳児クラスが多く発生している。0歳児クラスに15か月を過ぎた子が増えてきてから0歳児クラスが増えてきており、逆に1歳児クラスで月齢が進むにつれ減ってきている。
- ② 場所：保育室内（12）、散歩車内（2）
- ③ 時間：午前主活動中（5）、食事前（おやつ、午前午後水分補給含）（3）、午後主活動中（2）、夕方合同保育中（2）、昼食後（2）

- ④ 場面：遊び (8), 食事準備 (2), 移動中 (2), 手洗い (1), 着替え (1)

遊び中と活動の切り替え場面で発生している。

- ① 動機：場所の取り合い (7), 玩具等ものの取り合い (5), その他 (2)
※「その他」は「ボールプールの網から指を出していた」「横にいた子が口に指を入れてきた」

第二節 かみつきと子ども相互の密度の関係

前述の麻布十番園の「かみつき」発生の事例では、いわゆる「けんか」が発展して「かみつき」につながる例はなく、たまたま近くにいた相手もっていたものに興味がわき、取ってしまった、たまたま自分の行きたい場所にほかの子がいた、というような動機になっており、かみついた子とかみつかれた子の間に接触以前に直接原因となる心情的関係性は無く「不意の接触」が原因であることがわかった。

「かみつき」はかみつく子、かみつかれる子がいて接触することで成立することから、園児が1名あるいは接触できない距離にいる場合は発生しない。接触できる距離に多くの園児がいればいるほど「かみつき」が発生する可能性は高まると考えられる。

藤岡・八木(1994)は前出の「かみつき」の外的要因の分析から、園児の密度の高さが「かみつき」の発生に関係しており、この視点から対策をすることの必要性を説いている (pp64-65)。

また、上山・倉盛・杉村(2017)も「かみつき」や「ひっかき」発生防止策への保育士の取組について聞き取り調査を行い、「噛みつき、引っ掻き傾向のある子に対して注意してみる、子どもとの1対1の関わりを持つ、子どもが一つの場所に密集しないようにするといった取り組みを行っていた」と述べており、保育士も子ども相互の密度の高さが「かみつき」発生に関係していると感じているものが少なくないことを示している。

第二章 子ども相互の密度とデイリープログラムの関係

ここまでで、「かみつき」の発生が子ども相互の密度に関係していることがわかった。ここでは保育園においてどのような場面で子ども相互の密度が上がる

のか、そして「かみつき」防止の方策としてデイリープログラムと環境面の工夫により園児相互の密度を下げることを提案する。

第一節 子ども相互の密度が上がるデイリープログラムの場面

藤岡・八木(1994)は「発生時間の問題でもう一つ注目しなければならないことは、かみつきの発生が日課（デイリー・プログラム）と緊密にリンクしている点である。（中略）とくに昼食の準備から午睡に到るもっとも忙しい時間帯に多発傾向が顕著であった。この時間帯に多発する理由としては、保育者の手不足や目がいきとどかないことのほかに、ここでは場面転換が目まぐるしく子どもの緊張度が高まること、また、場面転換の度毎に子どもの一箇所集中が起きやすく子ども相互の密度が高くなることがあげられる。

こうしたことから、保育者は日課の在り方がかみつきの発生を左右するという認識を持つべきであり、急激な場面転換を短時間のうちに繰り返すような密度の高い時間帯や子どもの一箇所集中を招き過密を生むような日課の検討が求められる。」と述べ、子ども相互の密度が上がるデイリープログラムの場面を減らす、もしくはそうした場面で子ども相互の密度が下がる工夫をすることが「かみつき」防止に有効であることを示唆している。

以下、筆者の勤務する保育施設での観察から子ども相互の密度が上がるデイリープログラムの場面を挙げる。

① トイレ

面積が狭く、便器の数も限られているため、複数名の園児を連れていくことで密度が上がる。排泄が自立し、各自のタイミングでトイレに行く場合はあまり密度が上がる場面はないと考えられるが、保育者がオムツを変えることが多い2歳児以下の子どもでは、その時の職員配置にもよるが、一人で同時に2名以上の園児をトイレに連れていくことは多い。

② 着替え

2歳児以下のまだ自分ひとりで衣服の着脱が難しい園児に対しては保育者が着脱を援助することになるが、一対一での対応ではなく一度に複数名の着替えを援助する場面が発生する。保育者から手の届く空間に複数名の園児を座らせたり、立たせたりしながら援助することになり子ども相互の密度があがる場面が発生する。

③ 帽子・靴下の着脱

保育者が援助するために複数名を保育者の周りに座らせることで子ども相互の密度が上がる場面が発生する。また、多くの園で、自分ひとりで自分の帽子をかぶったり、靴下をはいたりすることが難しい2歳児以下のクラスでは職員が援助しやすいように園児の名前やマーク、番号で目印をつけた帽子入れ、靴下入れといったものを利用しているため、自分で帽子や靴下を手を取ったり片づけたりする園児がその周りに集まることでも密度が上がる場面が発生する。

④ 散歩・園外活動（遊具、出発・帰園時の玄関、歩行中、散歩車の車内）

園庭や公園では比較的広い空間での活動となるため密度が上がる場面が発生しにくいと考えられるが、滑り台やブランコ、鉄棒など数の限られると同時に一人ずつ使用する遊具においては順番待ちのため、密度が上がる場面が発生する。年齢があがるにつれ、自分の遊びたい遊具で自由に遊ぶようになるため発生頻度は下がるが、年齢が低いほど、保育者の援助が必要となり、順番待ちのため園児が集まり密度が上がる場面の発生頻度が上がる。

また、園舎の構造にもよるが、出発・帰園時の玄関も密度が上がりがちである。自分ではけない低年齢児が保育者の援助で順番に履く（脱ぐ）ために保育者の周りであつまったり、先に靴を履いた（脱いだ）子どもが待っている間どこかに行ってしまうよう保育者の目の届くところに集めておいたりするためである。

歩行中はほとんどの場合、安全のために手をつないで隊列を組んで歩く。そのため子ども同士の距離は近くなり、密度は上がる。散歩車に乗る低年齢児は一定の空間に複数名の園児が入ることになり当然のことながら密度は高い状態となる。

⑤ 施設内の移動時

保育室から保育室への移動の際には、2歳児以下のクラスでは事前にどこへ移動すると保育者が説明しても理解していなかったり、移動中に目に入った興味を引くものにつられて違うところに行ってしまうたりすることがある。また、単純に歩くという行為が楽しく遊んでしまったり走り出したりすることも多い。これらを防ぐために保育者は園児の気をひく声掛けを行ってなるべく集まった形で移動したり、「電車ごっこ」などで隊列を組ませて移動したりすることで子ども相互の密度が上がる場面が発生

する。

⑥ 絵本の読み聞かせ、手遊び等

絵本の読み聞かせや手遊びはそれ自体を目的として遊びの中で行うことももちろんあるが、場面切り替えの際に園児の意識を保育士に向けさせ、一か所に集め落ち着かせせる目的で行われることも多い。この場合は園児を集める目的で行っているため、当然のことながら子ども相互の密度が上がる場面が発生する。

⑦ 玩具の取り合い（一つしかない玩具、玩具提供の切替時）

一つしかない玩具を複数の園児が使用しようとする時や、使いたい園児に対して玩具の数が少ない場合は、当然のことながらその玩具に複数の園児が集まり子ども相互の密度が上がる場面が発生する。

また、ある程度自由に園児が玩具を使用できる環境にあり、数や種類が十分にあったとしても、飽きてきて次の遊びが見つけれない園児に次の遊びを促したり、その時のねらいにあった遊びを促すために保育士が主導で使用されていない別の玩具での遊びへの切り替えをしたりすることがある。そういった場合目新しい玩具に複数の園児が集まり子ども相互の密度が上がる場面が発生する。

⑧ 保育室の窓

子どもにとって窓から外の風景を見るという行為は、通常みている保育室内の風景とは異なる風景を見ることができ、時には窓外で動く人や車など様々なものを見ることができるなど、興味を引く行為である。

筆者の勤務する園では保育室やトイレと廊下の出入り口や保育室と保育室の間の扉すべてに縦長のガラス窓が入っている。この窓は幅が 12 cm のため、窓外を見たい園児が複数名いると、そこに子ども相互の密度の上がる場面が発生する。

第二節 子ども相互の密度を下げることの方策

森本他(2012)では、「かみつき」だけでなく「ひっかき」も含め「乳児保育におけるトラブル」として要因と解決策の研究がなされている。その中で藤岡・八木(1994)の密度への言及に着目し、「密度」への注目は、非常に興味深い視点

であるが、「密度」の緩和に対する示唆が抽象的なため、保育実践とは結び付きにくいように思われる」と述べたうえで、「従来の子どもからの視点ではなく、トラブル発生 of 積極的な要因が保育環境自体にあると仮定してアプローチを試み」ている。

彼らの3か月間にわたる20園の1歳児クラスのトラブル発生数の調査、保育士への聞き取り調査、トラブル件数の少ない3園でビデオ撮影によるより詳細な保育の様子 of 分析調査の結果から、以下のようなトラブル防止策が推察される。

- ① 保育士 of 目(手) of 届く範囲に子どもを集め活動する(あえて密集を作る)ことで、トラブル発生 of 原因自体は排除されないが、トラブルが発生しそうになった時に未然に防げるようにする。
- ② 環境構成や子ども一人ひとりに合わせデイリープログラムを工夫することで子ども of 密集が起こらないようにする。

調査結果では面積自体とトラブル発生数に明らかな相関関係は見られなかったが、トラブル of 発生には「遊んでいるときの子ども of 密集度」という因子が関わっていることが見て取れ、保育士が意識的あるいは無意識に密集に対してどう対応するか of 工夫をしていることがわかる。森本他(2012)によれば① of 防止策は言わば「かみつきを防ぐ保育」であり、保育士 of スキルや保育士相互 of 連携、その前提としての十分な保育士数が必要とされる。② of 防止策は言わば「かみつかなくてもいい保育」であり、保育士 of スキルや数に依存するのではなく、環境構成やデイリープログラム of 工夫、個々の子ども of 生活リズム of 把握が十分行われることが必要とされる。

森本他(2012)は「かみつかなくてもいい保育」と「かみつきを防ぐ保育」 of どちらに優位性を見出すのではなく、両者を包括していることを理想とし、さらに言うならば、その順序こそが安心安全へと繋がる最大のファクターとなる」と結論している。

この考察から、当園について考えてみると、これまでの当園 of デイリープログラムや環境構成 of 面からは「かみつきを防ぐ保育」であった。しかしながら保育士数 of 数も必要以上に多くいるわけではなく、保育士 of 約半数が経験3年未満という実態からすれば「かみつかなくてもいい保育」を目指すべきであると考えられる。

具体的な方策としては、端的に言えば、デイリープログラムと環境設定 of 工夫

により、前節で述べた子ども相互の密度が上がる場面を作らない、あるいはそういった場面での人数を少なくする、ということになる。

筆者の勤務する施設での具体例に対する方策例としては以下のようなものが挙げられる

① トイレ

一度に連れていく人数を減らす。「トイレ（おむつ替え）の時間」というような一斉保育的なデイリープログラムの作り方ではなく、個々の子どもの排泄リズムに合わせたトイレ（オムツ替え）を行うようにしていくことであえて人数を減らすというより、一度に連れていく必要がある人数を減らすことができる。

② 着替え

「いただきます」「ごちそうさま」を一斉に行わないことで一度に着替える人数を減らす

③ 帽子・靴下の着脱

その前の活動からはっきり切り替えず散歩に興味を持った子から順次行うことで人数を減らす。

④ 散歩・園外活動（遊具、出発・帰園時の玄関、歩行中、散歩車の車内）

⑤ 施設内の移動時

⑥ 絵本の読み聞かせ、手遊び等

なるべく一斉に行う場面を減らす。一斉に行う際には椅子に座る。

⑦ 玩具の取り合い（一つしかない玩具、玩具提供の切替時）

コーナー展開しなるべく玩具の種類・数が多くなり、子どもが自由に選べる環境へ

⑧ 保育室の窓

場面によっては紙や布を貼りふさぐ。

2018年9月第1週に1歳児クラスに3回発生し、これら方策を実施。

→ 実施後、10月末まで7週「かみつき」なし。

→ 11月に入り職員の入替わりがあり、再度発生するようになった。また、これまで「かみつき」が見られなかった0歳児クラスで発生するようになった。

→ 12月ごろより1歳児クラスも落ち着きはじめ、環境設定とデイリー

プログラムの方策実施を進めることで「かみつき」減少。11月3週以降は1歳児クラスで発生なし。

- 1月より0歳児室の環境設定を変更。「かみつき」はなくなっていないものの頻度としては減少している（11月、12月各2回、1月、2月各1回）。

今回の方策実施後は1歳児クラス、0歳児クラスどちらも「かみつき」発生数の減少が見られた。1歳児クラスは月齢があがり「かみつき」そのものが少なくなってくる月齢になってきていることもあるが、0歳児はむしろ「かみつき」が多くなってくる月齢が増えていることを考えれば一定の効果が出ていると考えられる。

課題

「かみつき」の問題は一人一人の子どもの発達支援・家庭支援の中で総合的に解決すべきものである。しかしながら、このことが「かみつき」の問題を子どもの発達や家庭環境に起因する部分が大きく、保育士の側では対処することが難しいものとして、対策がしっかりなされないことにつながっているとも考えられる。総合的に解決すべきものを分析し、切り分け、保育士が対処できるものを抽出し、対処していく姿勢を施設として常に保つための工夫も考えていかなければならない。

保育所が提供する保育環境、中でも子どもの密度が、「かみつき」が起きる一因であるならば、まずは密度が高まる場面を減らし、「かみつき」が起こりにくい環境を提供していくこと保育所の責務である。今回、「かみつき」防止に対する施設の組織的な取り組みとしてデイリープログラムと環境設定の工夫を挙げた。今後はこれらの工夫が一回性のものになってしまうのではなく、これらの工夫がなされていない状況になったときに、保育士ひとりひとりが修正していけるようにする必要がある。そのために施設独自の「かみつき防止マニュアル」的なものを作成していくことが有効ではないかと考えている。これにより、保育士が「かみつき」が発生した際の対応策として「目を離さないようにする」「近くにいて止められるようにする」といった対症療法的なものではなく、デイリープ

プログラムや環境構成のどこが「かみつき」発生の原因になったのか分析し、対応策を考え、修正を加えることができるようにしていきたい。

また、「かみつき」の原因は密度以外にも様々な原因がある。園児の発達状況、性格、家庭環境、その日の体調など様々な要因が絡み合っている。これらの要因についても、どのような要因がどういった状況の時に「かみつき」発生するのかを分析することで、「かみつき」をしやすい子を「最近噛んだ」という経験値だけでなく抽出することができ、今回のデイリープログラムや環境構成の工夫による防止策を補完することができるのではないだろうか。

施設長など管理者が本稿で示したような方策を、デイリープログラムや環境構成について細かく指示・管理をすることでも「かみつき」防止には有効であろうが、日々変化する現実の保育の状況に対応するためには現場の保育士一人ひとりが組織内で共有化・体系化された知識に基づきデイリープログラムや環境構成に対し微調整を加えることが現実的には必要になってくる。

今回の考察をきっかけに、「かみつき」だけでなく、様々な保育の現場で起こる問題に対して、個々の保育士の実践を共有し、組織全体として共有し体系化、体系化された知識をもとに個々の保育士が実践、というサイクルを確立していくことをさらなる課題としたい。

参考文献

- 金子保, 日野原正幸, 二木武. (1968). 「乳幼児のかみつき行動に関する研究」. 小児の精神と神経 第8巻2号, pp.35-38.
- 細田由紀子, 戸田大樹, 氏家博子. (2016). 「乳幼児の噛みつきの実態と保育士の対応方法に関する実証的研究」. 創大教育研究 第26号, pp.1-9.
- 上山瑠津子, 倉盛美穂子, 杉村信一郎. (2017). 「保育における組織的なリスクマネジメントを通じた環境調整」. こども環境学研究 13(2), 47-53.
- 森本信也, 他. (2012). 「乳児保育におけるトラブルの要因とその解決に関する研究」. 保育科学研究 第3巻, pp.50-74.
- 西川由紀子, 射場美恵子. (2009). 『「かみつき」をなくすために一保育をどう見直すか (保育と子育て21)』 . かもがわ出版.
- 中川智之. (2016). 「1歳児クラスにおける「かみつき」行動の実態と要因の検

討 — 或る保育所における 1 年間の記録の分析を通して —」. 川崎医療短期大学紀要 36 号, pp.53~59.

中村尋子, 北野哲也, 藤岡佐規子, 八木義雄, 山下藹子. (1998). 「保育所児におけるかみつきの研究」. 日本保育学会大会研究論文集 (51), pp.506-507.

中村尋子, 北野哲也, 藤岡佐規子, 八木義雄, 山下藹子. (1999). 「保育所児におけるかみつきの研究- 2 -」. 日本保育学会大会研究論文集 (52), pp.116-117.

藤岡佐規子, 八木義雄. (1994). 「保育所児におけるかみつきの研究」. 日本保健福祉学会誌 1 巻 1 号, 57-66.